

第6回

須磨寺旗争奪少年少女野球大会

日 時 : 令和4年8月27日(土) 8時45分～

場 所 : G7スタジアム神戸

主 催 大本山須磨寺

運 営 西神戸須磨軟式少年少女野球連盟
神戸西区少年野球連盟

後 援 神戸新聞社

協 賛 須磨区役所
オリックス野球クラブ株式会社
ナガセケンコー株式会社

第6回須磨寺旗争奪少年・少女野球大会 開会式 式次第

日 時 : 令和4年8月27日(土) 8時45分～
場 所 : G7スタジアム神戸

- 選手集合 午前 8時15分 グラウンド内
- 開会宣言 西神戸須磨軟式少年少女野球連盟 理事長 藤原 健男
- 国旗掲揚
- 前年度優勝旗・準優勝杯の返還並びにレプリカの授与
6年生の部 優勝:明神スラッガーズ 準優勝:花谷少年野球部
5年生の部 優勝:WBE 準優勝:本山フレンズ
- 挨拶
主催者挨拶 ○ 本大会会長 小池 弘三
○ 神戸西区少年野球連盟 理事長 室井 紀彦
○ 西神戸須磨軟式少年少女野球連盟 会長 志賀 久高
来賓挨拶 ○ 須磨区長 熊谷 保徳
○ オリックス野球クラブ
- 審判長訓示 西神戸須磨軟式少年少女野球連盟 審判部長 光辻 慎二
- 選手宣誓 須磨ライズ 主 将 児島 遼
- 始球式 投手:熊谷区長 捕手:寺本 隼 打者:小池大会会長
- 閉会の挨拶 神戸西区少年野球連盟 副理事長 佐伯 康裕

第6回須磨寺旗争奪少年・少女野球大会大会規則

- ① この大会の競技規則は当該年度「公認野球規則」及び「全日本軟式野球連盟競技者必携・学童野球の関する事項及び下記細則により試合を行う。大会特別規定を設け、その規定を優先とする。
- ② 試合は6回とし、80分を超えれば新しいイニングには入らない。(時間制を採用する)
決められた回数・時間が経過して勝負を決しない場合は、抽選とする。
- ③ 6年生の決勝戦は6回とし、80分を超えれば新しいイニングには入らない。時間を超えて同点の場合は、特別ルールを適用する。5年生の決勝戦は、6回とし80分を超えて新しいイニングには入らない。時間を超えて同点の場合は、抽選で勝負を決める。*特別ルールは1イニングのみ(無死満塁で打順は監督の選択とする。尚同点の場合は抽選で勝負を決める)
- ④ ベンチにはチーム責任者1名、監督(30番)1名、コーチ(29,28番)1名、スコアラーとし最大5名までとする。監督・コーチは、ユニフォームを着用し、それ以外はユニフォーム着用は認めない。給水係を1名認める(女性)
- ⑤ ベンチは組み合わせ番号の若い方を1塁側とする。試合会場を提供したチームは、1塁側もしくは3塁側を選択できることとする。
- ⑥ 大会試合球は連盟公認J球でナガセケンコー球を使用する。
- ⑦ バットは連盟公認(JSBB)のみ使用できる。木製バットも認める。
- ⑧ 捕手は必ず連盟公認のマスク、レガース、プロテクター、ヘルメット、ファールカップを着用すること。
- ⑨ 打者、走者、ベースコーチ、次打者は、必ずヘルメットを着用すること。
- ⑩ 監督・コーチは時間短縮のためタイムを求め、球審が認めたときは、選手に指示を与える。選手交代も同様に時間短縮につとめなければならない。
なお、抗議できるのは監督のみとする。但しルールの確認行為のみとする。どんな理由があろうと相手チームのプレイヤー及び審判員に対し、悪口・暴言を吐く事を禁ずる。
*3回終了後に5分間の給水タイムを設ける。攻撃の時間が長引いた時も本部又は審判員の判断により給水タイムを設けるが(給水タイム中はタイマーを停止する)
但し本部の判断、または季節や気候により変更する場合がある。
- ⑪ 試合におけるトラブルなどは球審または審判員の決定に従うこと。
- ⑫ その他、運営面におけるトラブル等は本部役員または担当役員の決定に従うこと。
- ⑬ グラウンドで発生した負傷は、主催者では一切のその責任は持たない。各チームで責任をもって対応すること。
- ⑭ 雨天の際の可否判断はそれぞれの担当役員から連絡するものとする。
- ⑮ 降雨、落雷等により試合を中止した場合、4回終了時で成立する(日程等の理由で会長・理事長又は執行部の判断により、再試合とせず継続試合とする場合がある)
- ⑯ 得点差によるコールドゲームを採用する。3回以上10点差、5回以上7点差とする(決勝戦にも適用する)
- ⑰ シートノックは4分間とする。但しG7スタジアム神戸および1・2回戦のノックはなしとする。
- ⑱ チームは試合開始時間の45分前に本部席にメンバー表4通(G7スタジアム神戸は5通)を提出し、先攻後攻のトスを行なう(G7スタジアム神戸で使用チームは、1時間前です)
- ⑲ ボークは最初から適用する(5年生は1回注意)
- ⑳ 審判について ○前審→若番(縦審判) ○後審→勝(縦審判)
- ㉑ 準決勝戦、決勝戦では投手の球数制限を70球とする。試合中に70球に達した場合はその打者の打撃が完了するまで認める。牽制球・投球練習球・反則投球数には含まない。過失により制限された投球を超えた場合、その打者の打撃完了まで認める。尚ペナルティーは無い【注】参照
【注】投球数のカウントは、本部が行う。残り10球に到達すると、本部は守備側チームに伝える。チームがカウントした投球数と本部がカウントした投球数とに差異があったとしても、本部の投球数カウントが有効である。差異に対しての異議は唱える事は一切出来ない。但し、試合中に本部での管理の不具合等により、投球数のカウントに支障が起きた場合は、チームがカウントしていた投球数を参考にして本部が投球数を確定する。
- ㉒ KSBLHPを参照し、新型コロナウイルス感染防止対策を各チームにて徹底して行って下さい。